

# 身体は社会運動の拠点になりうるか

## A. メルッチの惑星社会論をてがかりに

中央大学 鈴木鉄忠

### 1 目的

グローバリゼーションの言説が盛んになった 1990 年代、当時の議論の多くは、国民国家という一元的な境界を超えて「社会的なるもの」が拡大する過程に焦点を当てていた。そのなかでアルベルト・メルッチは、グローバル社会ではなく「惑星社会」という視点を提起した (Melucci 1996=2008: 3)。それによって、たしかに社会的行為の可能性が拡大し、相互依存がグローバルに進展する一方で、しかし依然として、私たちの社会生活は惑星地球と身体という物理的な限界に拘束されている事実を捉えようとした。そして「私たちを唯一の惑星空間につなぐ消去不可能な結節点を認識することによってのみ、私たちはいくつもの異なった問いを発し、新たな出口の探究を始めることができる」(Melucci 2001: 35) と述べ、惑星社会における社会運動を展望しようとした。本報告では、第 1 に、惑星社会を社会理論として捉えた上で、惑星社会における社会紛争の特徴を明らかにすること、第 2 に、「身体」に着目しながら、惑星社会における社会運動との関連を検討することを課題とする。それによって、惑星社会において身体が社会運動の拠点になるような諸条件を明らかにすることを目的とする。

### 2 方法

本報告の課題を明らかにするために、A. メルッチが惑星社会論を初めて展開した 1990 年代半ば以降の諸作品に着目する。そこから読み取れるのは、80 年代にメルッチが依拠していた、社会システム論に基づく「複合社会」とは異なる論点の浮上である。その一つが社会の「物理的な限界」である。惑星社会論において、社会の可能性が自然界の物理的な限界を完全に越えたという認識が、メルッチの社会理論の土台に据えられるようになる。「社会的なるもの」の自己増殖とその物理的な限界との緊張関係のなかで、社会紛争と社会運動の性質も変化する。

### 3 結果と考察

第 1 に、惑星社会では 2 つの不可逆的な変化が進行した。自然界が社会内部に包摂されていく「自然の脱自然化」である。そして自然の消失によって引き起こされるのが、「何が自然か」をめぐる定義の争い、すなわち「社会紛争の文化・化」である。これら 2 つの変化が社会紛争を文化の領域にシフトさせていく。第 2 に、そこで社会紛争の主たる標的の一つになるのが、身体である。なぜなら身体は、「標準」の定義によって社会的な介入を受ける文化物である同時に、生物学的構造や遺伝子を有する「自然物」であるという、両義性をもつからである。そこでメルッチは身体についての言説と身体に根ざした体験を区別し、後者に着目する。なぜなら身体に根ざした体験は、他者には譲渡不可能な個性が現れる場であり、それは完全には言語化されないゆえに、かえって「社会紛争の文化・化」に組み込まれない潜在力が有しているからである。この潜在力を社会運動の拠点に変えるためには、身体の徴候を問題ではなく、体験として読み解くような「聴くこと」への意識転換が重要になる。

### 文献

Melucci, Alberto, 1996, *The Playing Self*, New York: Cambridge University Press. (=2008, 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ』ハーベスト社)

Melucci, Alberto, 2001, *Culture in gioco: differenze per convivere*, Milano: Ledizioni.